高松大学紀要，33．1～11

「盂蘭盆」考

赤　松　孝　章

A Study of 'Yu-lan-pen'

Kosho Akamatsu

Abstract

This paper intends to give one interpretation of the origin of the word 'Yu-lan-pen（盂蘭盆）'.

There are varying opinions about this problem. One is that 'Yu-lan-pen（盂蘭盆）' is a copied sound from 'ullambana'（a word in Sanskrit, which means "hung topsy-turvy"）into Chinese characters. Another is 'Yu-lan-pen（盂蘭盆）' means "a vessel", or "a tray".

I support the latter, and I present some bases from Vinaya-piṭaka, Buddhist religious commandements.

1．はじめに

日本の伝統的行事として定着している「お盆」は，『盂蘭盆経』という仏教典籍にその文献的根拠を求めることができる。しかし，日本各地で行われている「お盆」行事の様相は経典の内容と大きくかけはなれたものとなっている。

『盂蘭盆経』に説かれる内容とは，後出する本文と和文試訳を通読すれば明らかであるが，そのあらすじは次の通りである。

釈尊の弟子の一人目連は，神通力という不思議な力を得たので，自分を育ててくれた父母の恩に報いるために父母をさとりの世界に導こうと考え，不思議な眼力をもっていろいろな世界を見渡したところ，亡き母は餓鬼道に落ちて飲むことも食べることもできずに骨と皮だけになって苦しんでいるのを見つけた。哀れに思った目連は，神通力で母の前に飯を盛った鉢を出現させた。しかし母がその鉢を手にとって食べようとすると，飯が燃え上がり炭となったので，とうとう食べることができなかった。目連は嘆き悲しみ，釈尊のところに行って事の次第を説明した。すると釈尊は，「汝の母は罪が深く，汝一人の力ではどうすることもできない。しかし十方の僧たちの威力を借りるならば母は苦しみから解放されるであろう」と述べ，「今度の七月十五日，僧たちの研修合宿の最終日に，七代さか

のぼる先祖と現在の厄難に苦しむ父母のために，百味の食事と五種の果実を盆器に汲みそそぎ，香油・錠燭・床敷・臥具は世間の最高のものを盆の中に入れて十方の大徳ある僧たちに差し上げなさい。そうすれば現在の父母でも七代さかのぼる先祖親族にいたるまで苦しみから解放されるであろう」と具体的な救済方法を教えた。目連が釈尊に教えられた通りすると，亡き母は即日に餓鬼の苦しみから脱出することができた。そして未来世の人々も「盂蘭盆」の中に百味の飲食を安置して十方の僧たちに施し，現在の父母ならびに七代さかのぼる先祖の救済を願うべきことを述べて，経典は終わる。

一方，日本の「お盆」行事は，こうした『盂蘭盆経』の内容とはかなり異なった次元で執り行われているといえる。すなわち，民間習俗としての「お盆」は，先祖の霊魂を「あの世」から「この世」に迎えてまつり，期間が過ぎるとそれを再び「あの世」に送る先祖供養の時期と考えられている。確かに『盂蘭盆経』にも七代さかのぼる先祖の平安を願うことが説かれているので，先祖供養的色彩は認められるが，日本の「お盆」行事のように死者の精霊を迎えたり送ったり，という趣旨の内容は見出せない。

日本における「お盆」行事の成立については，すでに多くの研究で指摘されているように，『盂蘭盆経』の目連救母説話をモチーフとして，中国の中元思想の影響とともに，日本古来の霊魂観と先祖崇拝の宗教的習俗が混在して形成されていったものと考えることができる。これらの「盂蘭盆」全般についての考察はすでに別の稿[1)]で報告しておいたところである。

今，本稿で問題とするところは，経題ともなっている「盂蘭盆」という語義についてである。この問題に関しては，古くは唐代から現在に至るまで，多くの研究者によって論じられ，さまざまな論議をかもし出してきた。その見解はおおむねふたつに分かれるといってよいであろう。

ひとつには「盂蘭盆」を梵語のullambana（ウッランバナ）の音を漢字に置き換えた，いわゆる音写であるとする説である。その場合，ullambanaという梵語は「逆さまに吊るされた」という意味で，漢訳では「倒懸」に相当する，という論説である。これは，唐代の学僧玄応が貞観年間（626－649）に勅命を受けて撰述したとされる『一切経音義』の中で「盂蘭盆，この言は訛なり。まさに烏藍婆拏と言う。この訳を倒懸と云う。…（中略）…旧く盂蘭盆はこれ貯食の器と云う。この言誤りなり[2)]」という見解を示して以来，定説のようにみなされ，現存する権威ある国語辞書や漢和辞典，百科辞典にいたるまでのほとんどがこの説を採用している。

もうひとつの説は，これも前出の玄応とほぼ同時代，唐の慧浄（578－645？）が『盂蘭盆経』の注釈書である『盂蘭盆経讃述』の中で，「盂蘭盆は，すなわち成食の器なり。…盆内にありて仏に奉じ僧に施し，もって倒懸の苦を救う。故に盆というなり[3]」と解釈したことを初見とする説で，「盂蘭盆」を盆器とするものである。

主に，「盂蘭盆」の語源を説明するにあたっては，以上の①ullambana説，②盆器説の二説が論議の中心となってきたわけである。

さらに最近の研究では，イラン系ソグド語で霊魂を意味する「ウルバン（urban）」が源流であるとか，イラン語の「ウラバーンulavān」（天則を回復した者の意味）であるとか，といった新説も現れ，問題が複雑になってきた[4]。

原文を忠実に読むと，「盂蘭盆」は盆器以外の何ものでもないことが明確であるのに，いったい何がここまで問題を混乱させてきたのであろうか。何故イラン語にまで研究の範囲を広げて説明しなければならないのか。他の仏教経典の中にはこの問題を解く鍵が残されていないのであろうか。こうした素朴な疑問に立って，「盂蘭盆」イコール「盆器」の手がかりを探してみようとするのが本稿の目的である。

2．本文及び和文試訳

『盂蘭盆経』という仏教典籍は，専門の研究者にとっては入手の容易な文献であるが，一般的にはあまり目にする機会が少ないと思われるので，まず，本文の紹介を行っておきたい。左の欄には『大正新脩大蔵経』（以下『大正蔵』と略す）第16巻所収の漢文本文を，右の欄には和文試訳を並列して掲載しておく。

『仏説盂蘭盆経』

西晋月氏三蔵竺法護訳

聞如是。一時仏在舎衛国祇樹給孤独園。大目乾連始得六通。欲度父母報乳哺之恩。即以道眼観視世間。見其亡母生餓鬼中。不見飲食皮骨連立。目連悲哀。即鉢盛飯往餉其母。母得鉢飯。便以左手障飯右手摶飯食未入口化成火炭。遂不得食。目連大叫悲号啼泣。馳還白仏。具陳如此。

『仏の説かれた盂蘭盆経』

西晋月氏の三蔵竺法護が訳した

このように聞いた。ある時釈尊は舎衛国の祇樹給孤独園におられた。目連は初めて六神通を得たので養育してくれた父母の恩に報いるために父母をさとりの世界に導こうと欲した。そこで不思議な眼力をもって世界を見渡したところ，亡き母が餓鬼の世界に落ちて飲むことも食べることもできず骨

と皮だけが立っているような状態であるのを見た。目連は哀れに思い，鉢に飯を盛って母のもとに送った。母は鉢を得て，左手で鉢を覆い右手で飯を丸めて食べようとしたが，口に入る前に燃え上がり炭となってしまい，食べることができなかった。目連はおおいに泣き叫び釈尊のところへ走って行き事の次第を説明した。

仏言。汝母罪根深結。非汝一人力所奈何。汝雖孝順声動天地。天神地神邪魔外道。道士四天王神。亦不能奈何。当須十方衆僧威神之力。乃得解脱。

釈尊が言われた。「汝の母は罪が深く，汝一人の力ではどうしようもない。汝の孝順の声が天地を動かそうとも，天地の神，邪魔，外道，道士，四天王の神々でさえどうしようもない。十方の僧たちの偉大な力をかりれば解脱することができるであろう。

吾今当為汝説救済之法。令一切難皆離憂苦罪障消除。

私はこれから汝に救済の方法を説き，すべての苦悩と罪障を除かせよう」。

仏告目連。十方衆僧於七月十五日僧自恣時。当為七世父母。及現在父母厄難中者。具飯百味五果汲灌盆器。香油錠燭床敷臥具。尽世甘美以著盆中。供養十方大徳衆僧。当此之日。一切聖衆或山間禅定或得四道果。或樹下経行。或六通自在教化声聞縁覚。或十地菩薩大人権現比丘。在大衆中皆同一心受鉢和羅飯。具清浄戒聖衆之道其徳汪洋。其有供養此等自恣僧者。現在父母七世父母六種親属。得出三途之苦。応時解脱衣食自然。若復有人父母現在者福楽百年。若已亡七世父母生天。自在化生入天華光。受無量快楽。時仏勅十方衆僧。皆先為施主家呪願。七世父母。行禅定意然後受食。初

釈尊は目連に言われた。「十方の僧たちが七月十五日に研修合宿の最終日を迎える。その時，七世の父母と現在の父母で災難に苦しんでいる者のために，百味の食事と五種の果実とを盆器に汲みそそぎ，香油・蠟燭・敷物・臥具などは世間の最高のものをそろえて盆の中に入れて十方の大徳の僧たちに供養しなさい。まさにこの日は，すべての聖者たちが山間で禅定し，或いは四種のさとりに達し，或いは樹木の下を静かに歩み，或いは六種の神通力で自在に仏弟子たちを教化し，或いは十地の菩薩が修行者に姿をかえ，人々の間で皆が心を一つにして施しの食事を受ける日なのだ。清浄戒を

受盆時。先安在仏塔前。衆僧呪願竟。便自受食。

保つ聖者たちの徳は広く大きい。これら研修合宿最終日の僧たちに供養するならば，現在の父母から七世の父母，六種の親族にいたるまで三途の苦から脱出することができ，その瞬間に解脱し衣食が自由自在となる。もしまた父母が健在の場合は福楽が百年に及び，もし死亡しているならば七世の父母は天に生まれかわり，自由に天華光に生まれ，無量の快楽を得るであろう」。その時釈尊は十方の僧たちに命じた。「皆まず施主の家の七代の父母ために祈願し，禅定して心を正した後に食を受けなさい。盆器を受けた時は，まず仏塔の前に安置し，僧たちは祈願をし終えて食を受けなさい」。

爾時目連比丘及此大会大菩薩衆。皆大歓喜。而目連悲啼泣声釈然除滅。是時目連其母。即於是日得脱一劫餓鬼之苦。

その時，目連比丘および大勢の菩薩の集団は皆大いに歓喜し，目連の悲しみ嘆く声はたちまちに消え去ってしまった。そして目連の母は即日に永い餓鬼の苦しみから脱出することができた。

爾時目連復白仏言。弟子所生父母。得蒙三宝功徳之力。衆僧威神之力故。若未来世一切仏弟子。行孝順者。亦応奉此盂蘭盆。救度現在父母乃至七世父母。為可爾不。

その時目連は再び釈尊に質問した。「現在の仏弟子たちの父母は三宝の功徳の力を蒙ることができます。僧たちの不思議な力のおかげです。もし未来世のすべての仏弟子たちも，孝順な者がこうして盂蘭盆をたてまつるならば現在の父母から七世の父母までが救済されるのでしょうか」。

仏言。大善快問。我正欲説。汝今復問。善男子。若有比丘比丘尼。国王太子王子大臣宰相。三公百官万民庶人。行孝慈者。皆応

釈尊が言われた。「大変よい質問だ。私がまさに説こうと思っていたことを汝が今また質問してくれた。善き人々よ，たとえば

為所生現在父母。過去七世父母。於七月十五日。仏歓喜日。僧自恣日。以百味飲食安盂蘭盆中。施十方自恣僧。乞願便使現在父母寿命百年無病。無一切苦悩之患。乃至七世父母離餓鬼苦。得生天人中福楽無極。	比丘，比丘尼，国王，太子，王子，大臣，宰相，三公，百官，万民，庶民にいたるまで，孝行をおこなう者は皆現在の父母から過去七世の父母のために七月十五日，仏が歓喜する日，僧たちの研修合宿最終日に百味の飲食を盂蘭盆の中に安置し十方の研修合宿終了の僧たちに施しなさい。現在の父母については寿命が百歳まで無病であり一切の苦悩の患いがないよう，また七世の父母にいたるまで餓鬼の苦しみから離れ天界に生まれ極まりのない福楽を得るように祈念してもらいなさい」。
仏告諸善男子善女人。是仏弟子修孝順者。応念念中常憶父母供養乃至七世父母。年年七月十五日。常以孝順慈憶所生父母。乃至七世父母。為作盂蘭盆施仏及僧。以報父母長養慈愛之恩。若一切仏弟子。応当奉持是法。	釈尊は，善き人々善き子女たちに告げられた。「ここにいる仏弟子たちで孝順をなす者はまさに一刻一刻常に父母のことを憶い七世の父母にいたるまで供養しなさい。そして毎年七月十五日には常に孝順をもって自分を生んでくれた父母から七世の父母にいたるまでを憶い，盂蘭盆を作って仏と僧に施しなさい。それによって父母の養育慈愛の恩に報いなさい。若しくはすべての仏弟子はこの教えを保ちなさい」。
爾時目連比丘。四輩弟子。聞仏所説歓喜奉行。	その時目連比丘と出家在家の男女たちは釈尊の説かれる教えを聞き歓喜して実行した。
仏説盂蘭盆経	仏の説かれた盂蘭盆経

3．「盂」と「盆」

さて，上出の本文を見ればわかるように，「盆」という語が中ほどに三回，「盂蘭盆」という語が後半部分に三回使われている。

「盆」の用例を見てみると，「飯百味と五果をそなえ盆器に汲みそそぎ，香油・錠燭・床敷・臥具は世の甘美を尽くし以って盆中に著けよ」という部分では明らかに施物を盆器に盛り付けることを意味している。また「初めに盆を受けた時は，先ず仏塔の前に安在し，衆僧が呪願し竟えてすなわち自ら食を受くべし」とある部分でも盆器としての「盆」であることは明白である。

一方「盂蘭盆」の語は後半部分でのみ使用される。この部分は，未来世の仏弟子たちも目連と同じ救済方法をとるべきことを述べるところである。その用例は「若しは未来世の一切の仏弟子で孝順の者は，またまさにこの盂蘭盆を奉り現在の父母乃至七世の父母を救度すべし」，「百味飲食を以って盂蘭盆の中に安んじ，十方自恣僧に施す」，「所生の父母乃至七世の父母を憶い，為に盂蘭盆を作り仏及び僧に施す」とあり，ここでも三例とも盆器を表わしているといえる。

この「盂蘭盆」を「倒懸」の意味をもつullambanaの音写と解するには，いささか無理があるとしか思えない。経典の内容を見てもわかるように，目連の母が餓鬼道に落ちて苦しんでいる姿が描かれてはいるが，「逆さに吊るされた苦しみ」とはどこにも書かれていない。従来の研究では餓鬼道の苦しみを「逆さに吊るされた苦しみ」と解する向きもあるが，こじつけの感を免れない。

したがって以上見てきたように，『盂蘭盆経』の原文に登場する「盆」も「盂蘭盆」も，どちらも器としての盆器を意味していることは疑いようのない事実である。

ところで，漢字の「盂」と「盆」はともに「皿」を共通の部首にもつことからもわかるように，器物の一種である。諸橋轍次氏の『大漢和辞典』で調べてみると，

「盂」　わん，　めしを盛るわん，　みづのみわん（『大漢和辞典』巻８，p.103）

「盆」　はち，　瓦器の名，　水を盛る鉢　　（同上，p.104）

等の解釈を与えている。

ここで，漢文仏教典籍の中で「盂」と「盆」の用例を見てみよう（今回は時間の都合上，戒律関係典籍に限っての調査となった）。

『大正蔵』第22巻律部１所収　［（　）内は『大正蔵』のページ数とabcで段落を表わす］

①『五分律』巻第８「仏言以盆盛肥肉汁坐著中」（p.54a）

②『　同　』巻第26「仏言。聴作盆杆安環耳」（p.171c）

③『　同　』巻第28「比丘須瓶盆器物」（p.180b）

④『四分律』巻第１「若大小盆及余種種水器」（p.574c）

⑤『　同　』巻第15「或須盂或須盆或須小椀」（p. 665c）

⑥『　同　』第巻42「衆器皆満。大盆小盆大鉢小鉢」（p. 870b）

『大正蔵』第23巻律部２所収

①『十誦律』巻第９「学作盆盂樓犁車乗輦輿…学転輪作盆瓶釜蓋」（p. 65a）

②『　同　』巻第９「汝応作機関木人盆盂樓犁車乗輦輿…転輪作盆瓶甕釜蓋大鉢」（p. 65b）

③『　同　』巻第12「看瓮盂器中皆満不減」（p. 88c）

④『　同　』巻第38「盛満器施僧…応畜槽杆盆浸衣」（p. 279a）

⑤『　同　』巻第39「見是僧坊清浄荘厳釜鑊甕器盆物坐具臥具満僧坊中」（p. 283a）

⑥『　同　』巻第43「見其中床榻臥具盆器釜鑊種種備具清浄可住」（p. 309b）

⑦『　同　』巻第59「見臥具床榻釜鑊盆器斗斛瓶甕衆僧生活物」（p. 438c）

⑧『根本説一切有部毘奈耶』巻第４「為求染汁盆釜器因」（p. 643c）

⑨『　同　』巻第22「疎洗盂器」（p. 745c）

『大正蔵』第24巻律部３所収

①『毘奈耶破僧事』巻第11「我有熟豆在盆器中」（p. 158a）

②『沙弥戒経』「甕器盂鉢等」（p. 935b）

③『五百問事経』「衆僧有種種盆器。器盛食」（p. 991b）

④『優婆塞戒経』「瓶盆燭灯床臥敷具」（p. 1060c）

これらの用例を見てみると，『盂蘭盆経』以外の漢文典籍においても「盂」と「盆」どちらも器物の意味で使用されていることが明白である。

さらに，「盂」と「盆」という言葉は使われていないが，布施を行う時，器物に施物を盛り付けることを規定した条文がいくつか認められる。たとえば『五分律』巻第18においては「時諸居士。布薩日持時食時飲七日薬終身薬至僧坊供養…辦器盛其所齎物…常讃歎布施」（『大正蔵』第22巻，p. 123b）とある。ここに言う「布薩」とは仏教教団の定期集会のことであり，毎月満月と新月の日に，出家の僧は一堂に会して戒律の箇条を読みあげて罪を懺悔し，在家の信者は八戒を守り，説法を聞き，僧尼に飲食の供養をすることになっている[5]。この「布薩日」に飲食や薬を僧に供養し，「齎物」すなわち日常の生活用品を「辦器」に盛り付けて布施を行うことを示している。また『摩訶僧祇律』巻第３には「各満鉢宝物既布施已」（『大正蔵』第22巻，p. 252c）として，宝物を布施するに器物の鉢を用いていることが記録されている。同じく『摩訶僧祇律』巻第33に示す「至布薩時盛著瓮

中」（『大正蔵』第22巻，p.493b）は「布薩」の時，器物に盛りつけて施しをすることの規定を行っている。『十誦律』巻第23では「一処夏安居。先作如是法。…若有長食。盛浄器中蓋著一処」（『大正蔵』第23巻，p.165a）とあり，「夏安居」に浄器に食を盛って供養することが説かれる。またパーリ語所伝の律でも，たとえば『南伝大蔵経』の自恣犍度に「比丘等よ，此処に一住処に於て自恣の日に人々布施を供えて夜甚く更く」（『南伝大蔵経』第3巻，p.297）とし，安居最終日にあたる僧自恣の日に人々が布施を行ったことを示す記述が見える。また同じく第八衣犍度に「比丘等よ，溢れを得くる盆を置くことを許す」（『同』第3巻，p.499）という条文が見え，僧が盆器を所有していたことが知られる。

以上，律蔵関係のテキストから，「盂蘭盆」が盆器であることを証明する手がかりを列挙してきたわけであるが，残された問題が今ひとつある。

4．「蘭」のもつ意味

前節で述べたように，「盂」と「盆」が器物を意味し，『盂蘭盆経』に登場する「盂蘭盆」なる言葉も盆器である，ということは理解していただけるものと考える。しかし，前述のように，「盂蘭盆」を梵語のullambanaの音写であるとか，イラン語のurbanのことであるとか，という見解の相違を生じさせた原因はほかでもなく「盂」と「盆」との間に「蘭」という一字が存在するためであろう。経題が元来『盂蘭盆経』でなく『盂盆経』であったならば，おそらくこうした混乱は起こり得なかったはずである。

『盂蘭盆経』の異訳とされる『仏説報恩奉盆経』という経典が現存している（『大正蔵』第16巻，p.780a）が，この経題からは明らかに，「報恩のために盆器を奉る」といった趣旨がうかがえる。ちなみにこの『仏説報恩奉盆経』の中では一度も「盂」も「盆」も，また「盂蘭盆」という言葉も一度も使われていない。ただ一度だけ「七月十五日当為七世父母在厄難中者。具麨飯五果汲灌盆器」とある記述からは，経題の「盆」が器物であることを示していると推測できる。

とにかく「蘭」の一字が問題の混乱を引き起こす原因であることは容易に想像がつくのであるが，それではこの「蘭」がいったいどういう意味を持ちどういう役割を果たす文字なのか，ということになると簡単には解決の糸口は見出せない。

「蘭」の字の持つ意味は，もともと植物の一種の名であった。中国においては紀元前よりその高雅な香りと美しい姿から，君子の花，国花として貴ばれてきた，とされる。諸橋氏の『漢和大辞典』によれば，春秋時代の楚王の宮殿や漢代の宮中図書館などは「蘭台」

と呼ばれていた。そのほかにも「蘭肴（＝芳しい料理）」，「蘭儀（＝美しい容貌）」，「蘭宮（＝美しい宮殿）」，「蘭章（＝立派な文辞）」などのように，「美しい」とか「清らかな」，「立派な」などといった形容詞として使われる用例は枚挙にいとまがない。そうしたことを根拠に別の拙稿では，「蘭」は具体的なものを指すのではなく，むしろ形容詞としての役割をはたしているのではないかと推測される，と述べておいた。しかし，漢語の熟語の場合，形容詞＋名詞（修飾語＋被修飾語）の類型は存在するが，名詞と名詞の間に形容詞をはさむ類型，すなわち名詞＋形容詞＋名詞といった型は存在しないようである[6]。この点において，ullambana音写説が浮かび上がって来たのであろう。

中国六朝時代，六世紀半ばの荆楚地方の行事と風俗を記録した書物，『荆楚歳時記』では，「五月五日，之を浴蘭節と謂う。四民並びに蹋百草の戯あり。艾を採りて以って人を為り，門戸の上に懸け，以って毒気を禳う。菖蒲を以って，或るいは鏤み或るいは屑として酒に泛ぶ」とあり，それに対する隋の杜公瞻の注では「『大戴礼』を按ずるに曰く。五月五日，蘭を蓄え沐浴を為すと。『楚辞』に曰く。蘭湯に浴し芳華に沐すと。之を浴蘭節と謂う」（東洋文庫324，守屋美都雄『荆楚歳時記』，p. 144）と記録している。五月五日の端午の節句と菖蒲の関係は日本でもおなじみの取り合わせであるが，菖蒲とともに「蘭」が登場するることは意外であるかもしれない。しかしここでは菖蒲の持つ辟邪辟病と同じ効果を「蘭」にも認めていたことが述べられているのである[7]。さらに守屋美都雄氏は『荆楚歳時記』の三月三日上巳の節句の注記としてM. グラネ氏の『支那古代の祭礼と歌謡』の論説を引き，「氏の説によれば，溱・洧の沿の男女の合会や，摘蘭や，唱和は，鄭（河南省鄭県）における春の祭礼である。雪解けによって水かさの増したとき，すなわち，桃花始めて花咲き，雨水初めて訪れる時期に行われたのであって，蘭を摘むことは祭礼の特色の一をなすものであって，それは邪気を免れたり，蟲毒に罹らないための手段であり，祓除の儀礼であった。この蘭を持って，邪悪・不祥・気穢・若しくは歳穢などを祓いのけたのは川の上であり…」と，祓禊の問題と「蘭」の関係に言及し，「蘭」による辟邪・病魔祓除を強調している（東洋文庫324，守屋美都雄『荆楚歳時記』，pp. 122－123）。

5．今後の課題

「盂蘭盆」の語義解釈の問題に関して，従来の研究では仏教典籍の中における布施行の方法との考察はされていなかった。そこで以上，不充分ながらその見過ごされてきた研究分野を補うべく試論を提示してきたわけであるが，まだまだ完全に「盂蘭盆」の語源を解

明できたとは思えない。さらに律蔵以外の膨大な仏教典籍の中から，安居，自恣日，あるいは布薩日をも含めた布施の方法を詳細に調査する必要があると考えている。また，『盂蘭盆経』の成立がインド成立ではなく中国撰述と仮定した場合[8]，中元思想を始めとする中国道教とのからみも十分検討してみなければならない課題であろう[9]。

注

1) 拙稿「盂蘭盆について」（『島田治還暦記念論文集―言葉と文化―』，1997）
2) 玄応の『一切経音義』は慧林（783－807）の『一切経音義』に再録されているので，今はこれによる（『大正蔵』第54巻，p.535b）。
3) この『盂蘭盆経讃述』は，フランスのP．ペリオが敦煌から持ちかえった古写本群の中に遺っていたもので，冒頭部分を欠いている（『大正蔵』第85巻，p.540a）。
4) ullambana説をとるものに，Nanjo Bunyu "Catalogue of Chinese Translation of the Buddhist Tripitaka" 1883，池田澄達「盂蘭盆経に就いて」（『宗教研究』3－1，1926），荻原雲来「盂蘭盆の言語について」（『荻原雲来文集』，1938）がある。また「救済」を意味するullumpanaが原語であるとするのは，高楠順次郎「力の玄妙」（『ピタカ』8－5，1940），干潟竜祥「梵漢雑俎」（『智山学報』12・13，1964）があげられる。「ウルバン（urban）」説をとるのは岩本裕『仏教説話研究』（1979），「ウラバーン（ulavān）」説は井本英一「盂蘭盆の諸問題」（『オリエント』9－1，1967）である。「盆器説」は入澤崇「佛説盂蘭盆経成立考」（『仏教学研究』45・46，1990），田中文雄「〈盂蘭盆〉語義解釈考」（『道教文化への展望―道教文化研究論文集―』，1994）に見られる。
5) 中村元『佛教語大辞典』（縮刷版1981）p.1175参照。
6) 田中文雄氏の前掲論文では『歳華紀麗』という書の中に「蘭盆」という語を確認し，この場合「蘭」は「芳しい」とか「立派な」という意味で盆を修飾する用法ではないかと考えてる。
7) 諸橋氏の『大漢和辞典』では「蘭月」と「蘭秋」を陰暦7月の異称としている。「蘭月」は『提要録』，「蘭秋」は『梁元帝纂要』にそれぞれ出ているようであるが，果たして7月15日が盂蘭盆であるからこうした「蘭」の一字を入れた異名が創られたのであろうか。あるいは辟邪辟病の「蘭」の効用を示唆するのであろうか，検討の余地がある。
8) 岡部和雄「盂蘭盆経類の訳経史的考察」（『宗教研究』178，1964）参照。
9) 田中文雄前掲論文，吉岡義豊「中元盂蘭盆の道教的考察」（『道教と仏教』2，1970）参照。